



## 奥平俊六著「宗達の金銀泥絵 絵画と書の交響」

ジャズの本質は即興演奏にある。その場その時に自然に生まれる音楽なのだ。あらかじめ決められているのは主旋律だけであり、それを土台に演奏者同士の呼応を通して変奏が展開される。とりわけ私が好きなのは、コルトレーンの『マイ・フェイバリット・シングス』のライブ音源だ。演奏者同士が対話するように旋律を織り重ね、絡み合いながら音を紡いでいく。その雰囲気すべてを見事に封じ込めた音源で、日常から切り離された特別で濃密なひと時に魂が揺さぶられる。これと同じことが、絵画制作でも成り立つだろうか。絵と書の合作においても同様の呼応が生まれるのだろうか。

### 《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》

《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》（京都国立博物館所蔵）を鑑賞していたときのことだ。ある同僚が、墨で書かれた和歌の上に、銀泥が施されていることに気づいた。

(中略)

この和歌巻は、俵屋宗達が金銀泥で描いた下絵の上に、本阿弥光悦が三十六歌仙の和歌を散らし書きした作品だ。宗達は、鶴の群れが浜辺から飛び立ち、海上を舞い、別の浜辺へと降り立つ様子を描いた。

全長15mに及ぶ巻物全体を通してよどみなく展開され、始めから終わりまで鑑賞すると、ひとつの演劇を見終えたかのような感慨に包まれる。鶴や波を描く筆致はのびのびとしており、少しの迷いも感じられない。伝統的な料紙装飾の枠組みを遥かに超えるこの作品は、宗達が得意とした「金銀泥絵」のなかでも群を抜く傑作だ。

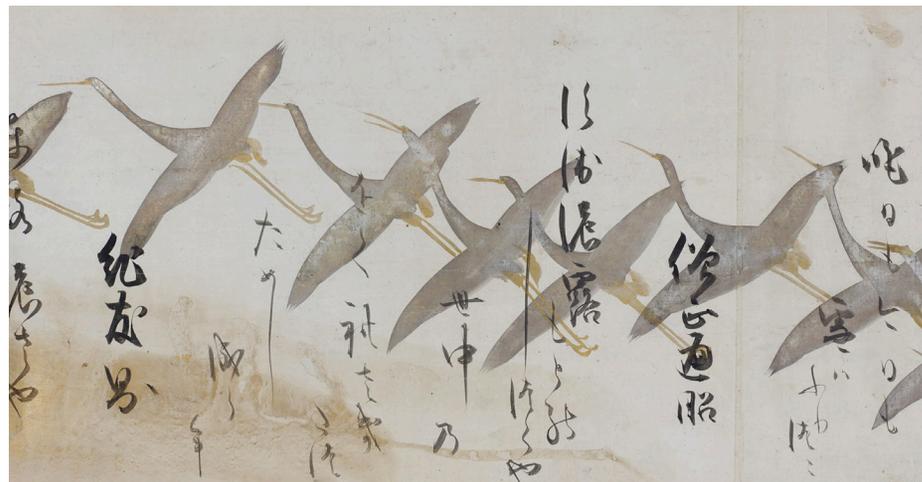
それでは、書の上に金銀泥が施されていることについては、どのように捉えるべきだろうか。

(中略)

近世初期の京都では、和歌や漢詩、連歌を楽しむ様々な集いが盛んに開かれていた。(中略) 金銀を使った宗達と光悦の合作は、そうした文化的背景のもと、文人たちが集う席で即興的に生み出されたのだろう。

Excerpts from Okudaira, Shunroku. "Sōtatsu's Gold-and-Silver Paintings: The Interaction Between Painting and Calligraphy." In *Sōtatsu*, edited by Yukio Lippit and James T. Ulak, 44–45 and 61.

Washington, D.C.: Arthur M. Sacker Gallery, Smithsonian Institution, 2015. (奥平俊六著「宗達の金銀泥絵 絵画と書の交響」ユキオ・リビット、ジェームズ・T・ユーラク編『宗達』 p.44–45, 61 アーサー・M・サックラー・ギャラリー スミソニアン協会 2015年)



本阿弥光悦・俵屋宗達 《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》(部分) 京都国立博物館